

As for my belonging to the rear-guard in general, certain it is, I bring up the rear of my chimney—which, by the way, is this moment before me—and that, too, both in fancy and fact. [353]

私が概してしんがり男であることは、我が家の煙突の後ろに回っていることから明らかだし—現に今、この瞬間にも煙突は私の前に立っている—しかもこれは想像上そう思いこんでいると同時に敵たる事実でもある。

と述べ、あくまでも煙突の後見人に徹しようとしている。つまり、煙突が先駆けなら、「私」はしんがりにも相当し、語り手には煙突を守る役割が運命づけられているとも言わんばかりである。しかも「想像上だけでなく現実に」(“both in fancy and fact”)と述べられている点は注目に値する。後に妻に向かって語り手が、煙突は「一つの事実、ありのままの敵然たる事実」(“a fact—a sober, substantial fact” [360])だと改めて述べている点からも、煙突が単なる抽象概念ではなく、実体として探究に値するものであることが伺える。ここに「私」による煙突の探究というテーマが生じる様に思える。

3. 煙突と近代建築との比較

語り手は「世界中、至る所で、古式ゆかしきものが財布(経済優先主義)に屈してしまっている」“All the world over, the picturesque yields to the pocketesque” [357]と世を憐んでいるが、ここに表されている通り、この作品で作者Melvilleは煙突と近代建築との比較を“picturesque”ⁱⁱⁱ対“pocketesque”という図式で示そうとしている様に思える。

まず語り手は外観から「私の煙突」と近代建築との比較を試みている。即ち、私と私の煙突が「二人とも相当な肥満漢」“we are both rather obese [353]”で「二人とも利用しきれないほどにたっぷりとスペースを有している」“there is abundance of space, and to spare, for both of us [355]”のに対し、近代建築は「痩せ身の男」“thin men [354]”に譬えられ、「幅で欠ける物を高さで補わなければならない」“what is lacking in breadth must be made up in height [354]”と言わんばかりに互いに競い合う都会人の「上昇志向の対抗意識」“emulous conceit of soaring out of them [354]”として揶揄されている。ここには作者Melvilleの芸術作品に対する姿勢が伺え、「壮大なもの(=宇宙的な大きさを備えた重厚な文学作品)対「高く聳えるもの(=名声)」という比較がなされている様にも思える。

これに続き、近代建築の特徴として「危険なほど空洞で、それゆえ事実上、脆弱」“treacherously hollow, and, in consequence, more or less weak [354]”な点が挙げられ、その根底には「もちろん、こうした近代様式の煙突を造る理由はスペースの節約にある」“Of course, the main reason of this style of chimney building is to economize room. [354]”という点が注目されている。そしてそれとは対照的に「私の煙突」の構造的特徴は以下のように描写されている。

The frame of the old house is of wood—which but the more sets forth the solidity of the chimney, which is of brick. And as the great wrought nails, binding the clapboards, are unknown in these degenerate days, so are the huge bricks in the chimney walls. [355]

木造の古い家であるだけに、煉瓦造りの煙突の堅固さがいやがうえにも目立つことになる。また羽目板を打ち付けてある鍛え抜かれた大釘などが、墮落の時代たる今日では姿を消している代物であるように、煙突の壁に積まれた大型の煉瓦もまた今日滅多にお目にかかれるものではない。

ここに述べられている様に、「鍛え抜かれた大釘」の様な経済原則を無視した、今日ではむしろ時代遅れといえるような高価かつ頑丈な材料を用いて煙突が造られている点、またそれと同時に煙突の姿が、「波頭から金槌型の頭を突きだした鯨の様に」“like an anvil-headed whale, through the crest of a billow [355]”と、鯨の飛翔にも譬えられている点は注目に値する。煙突に鯨の姿が重ねられているところからも、作者Melvilleにとっての煙突は、少なくとも「想像上(in fancy)」は『白鯨』で追い求めた世界の再現であ

ると考えられる。

『白鯨』第32章で語り手Ishmaelは「ケルンの大聖堂 (Cathedral of Cologne)」を例に挙げ、「小さな建造物は最初の建築家によって仕上げられてしまうだろうが、壮大な物、正真正銘の本物は常にその笠石を後生に委ねる」“small erections may be finished by their first architects; grand ones, true ones, ever leave the copestone to posterity”^{iv}と云って壮大な物への憧れを表明しているが、この作品“I and My Chimney”の語り手も「誰でも1平方フィートの土地を買って自由のポールを立てることは出来るが、壮大なトリアノン離宮のために何エーカーもの土地を用意するのは国王にしか出来ないことだ」“Any man can buy a square foot of land and plant a liberty-pole on it; but it takes a king to set apart whole acres for a grand Trianon. [354]”と、壮大な物に思いをはせている。更に『白鯨』第57章では「あの鯨の背にまたがり、軍艦の大錨をはみとなし、銛の束を拍車となして大空を駆けめぐりたい」“With a frigate’s anchors for my bridle-bitts and fascies of harpoons for spurs, would I could mount that whale and leap the topmost skies”^vと語り手の想いは宇宙空間を駆けめぐり、「煙突」の語り手も「恒星の途方もない距離を測るのと幾分似た方法によって」“by a method somewhat akin to those whereby the surprising distances of fixed stars are computed [358]”煙突を測ろうとしている。また『白鯨』第96章では「あらゆる書物の中で最も真実なのがソロモンの書で、伝道の書は鍛え抜かれた悲しみの美鋼だ (the truest of all books is Solomon’s, and Ecclesiastes is the fine hammered steel of woe)」^{vi}と述べられているが、この点からも“I and My Chimney”の語り手が「Solomonを唯一の文通相手にしている」“I have no correspondents except Solomon [368]”というのも頷ける。

それではここで述べられている「私の煙突」の堅固さを支えている根底にあるものは一体何なのか？「この煙突の設計者はケオプスのピラミッドを念頭に置いていたに違いない」“The architect of the chimney must have had the pyramid of Cheops before him [355]”との想念に駆られた語り手は、今度はピラミッド^{vii}の探究者さながら、煙突を探究したい誘惑に駆られ、スコップ片手に地下室へと下りていき、煙突の根本を掘り始める。その時の心情を語り手は次の様に回想している。

I set to work, digging round the foundation, especially at the corners thereof, obscurely prompted by dreams of striking upon some old, earthen-worn memorial of that by-gone day, when, into all this gloom, the light of heaven entered, as the masons laid the foundations-stones, peradventure sweltering under an August sun, or pelted by a March storm. [357]

私は煙突の土台の周り、取り分けその四隅のあたりを掘り起こす作業に取りかかった。その昔、石工たちがおそらく八月の炎天下で汗だくになったり、三月の嵐に打たれたりしながら土台石を積んだとき、この暗がり全体に天上の光が射し込んだものであろうが、私がここを掘り起こしに掛かったというのも、その昔日の古い土にまみれた記念物に出くわしたいという漠たる夢想に駆られてのことなのだ。

ここに述べられている様に、どうやら「私」が煙突の周囲を掘り起こす目的は、煙突を立てた先人の「石工たち (the masons)」の苦勞の遺物に巡り会いたいという一心であった様だ。この作品執筆当時のMelvilleの目指していた芸術は、煙突同様、「頭」は切り取られていても、即ち「名声」は伴わなくとも、必ずや「基礎の壮大さ」“the magnitude of this foundation [365]”を伴ったものであった筈で、語り手が煙突の根本を探るのも、人知れず努力を続けた先人たちの痕跡を確認するための、いわば儀式であったと考えられる。

おそらくSolomonもその中の一人だと思われるこの石工たちに対し、後に煙突の破壊者として登場するのが“NEW PETRA [369]”に住むという近代建築の「石工の親方」“a master-mason [368]”, スクライブ氏 (Mr. Scribe) なのである。“picturesque”対“pocketesque”という図式は、この後Solomon対Mr. Scribeという形を借りて展開されることになるが、その前に、「ありのままの厳然たる事実 (a sober, substantial fact)」としての煙突を探究しておく必要がある。

4. 煙突とは何か？

煙突と近代建築の対比がなされた後、今度はそれに続き、煙突の擁護者としての語り手と、近代建築の擁護者としての語り手の妻という対比がなされている。「結婚にあたっては、正反対の者同士がひかれ合う」“in wedlock contraries attract [361]”という「原理 (the doctrine)」に従い、この夫婦は存在し、語り手にとっての格言が「存在するものは全て正しい」“Whatever is, is right [360]”であるのに対し、「妻の格言は存在するものは全て誤りで、しかも正されねばならず、それも即刻正されねばならない」“Her maxim is, Whatever is, is wrong; and what is more, must be altered; and what is still more, must be altered right away [360]”というものだ、と述べられている。その「存在するもの全て」の中で、何故妻は「取り分け、何にもましてわが高い炉棚のついた老煙突に対して死に至るまで迫害するのをいとわない」“above all, high above all, would fain persecute, unto death, my high-mantled old chimney [362]”のであろうか？煙突は現代社会が信奉している経済原則からは逸脱したものではあるが、にもかかわらず、語り手に代表される一部の人間にとっては、「人間」乃至は「社会」にとって必要不可欠なものだと捉えられている。妻にとっては我が家を「迷宮的な住まい」“so labyrinthine an abode [361]”にしてしまう「家のガキ大将」“the bully of the house [361]”に他ならない煙突も「私」にとっては「ああ、何て温かい心の持ち主だ」“Ah, a warm heart has my chimney [360]”ということになる。このように見ていくと、煙突の存在は功利一辺倒へのアンチテーゼであり、すなわちこれはただ存在するだけで妻の信奉する功利主義にとっての脅威となるものなのである。別の場面で「これといって当たり障りのないことが人によっては最も腹の立つ原因となりうるのだ」“With some, inoffensiveness would seem a prime cause of offense. [370]”と語り手は言っているが、このことはまさに語り手の妻と煙突との関係を言い表している様に思える。

その一方で、今度は語り手の側から言うと、煙突は「人間」乃至は「社会」にとって必要不可欠なものであると信じているにもかかわらず、妻に対し、論理的にそれが証明できないものでもある。ここに語り手と妻との間に「コミュニケーションの不成立」という問題が発生する。「私と私の煙突と私のパイプは三人揃った長年の親友である」“I, and my chimney, and my pipe, from having been so much together, were three great cronies [367]”と語り手は言っているが、物言わぬ煙突、パイプが語り手の最大の理解者だとすれば、これは語り手が言語を用いてのコミュニケーションが不得手であるとはっきりと告白していることに他ならない。語り手は「私」と煙突との関係を「他に哲学的な会話につきあってくれる者が居ないため、私と私の煙突は互いに煙を吐き、哲学談義をしなければならない」“In dearth of other philosophical companionship, I and my chimney have to smoke and philosophize together. [376]”と説明しているが、これは丁度語り手が煙突の根本を掘っているところを訪ねてきた隣人に目撃された際の「私はこの煙突が単なる石を積み上げたものではなく、一人の人物だと見なしている」“I look upon this chimney less as a pile of masonry than as a personage. [358]”という弁明が隣人から到底理解されないことから伺える。つまり語り手は煙突やパイプとコミュニケーションが執れても、或いは既にこの世の者ではないSolomonと心は通じて、現存している正真正銘の人間とはコミュニケーションが執れないのである。

5. 「秘密の納戸」の持つ意味とその役割

煙突それ自体と同様、この作品においては、煙突内部にあるとされる「秘密の納戸 (secret closet)」もまた重要な役割を果たしている様に思える。なぜなら、そもそも「秘密の納戸」は存在するのか？また存在するとしたら、果たして煙突を取り壊すことなくそのことを証明できるのか？という問題が生じるからで、これは、神秘的なものの存在を如何に証明すべきか？という問題と直結する様に思えるからである。

「秘密の納戸」に関しては、語り手と妻、それに直接煙突の測量調査にあたり、「秘密の納戸」の存在を提唱した本人であるスクライブ氏の間で三者三様の見解が表明される。

まずスクライブ氏の見解は「私の見解としては、それらの不相応な範囲内に秘密の納戸が含まれているということです。」“My position is, that within those undue limits the secret closet is contained. [374]”

というもので、これは常識と照らし合わせてみて、煙突の構造上「不相応な範囲内 (undue limits)」即ち、非効率的な領域に秘密の納戸がある筈だと予め決めつけて総面積のつじつまを合わせた結果生じた見解である。ここには明らかに語り手との見解の相違が伺え、「壁の厚みを考慮にいれましたか、大小さまさまの？」“have you allowed for the walls, both main and sectional? [374]” だとか、「いくつもある暖炉の奥まった箇所や防火壁、煙道」“the recesses of so many fireplaces on a floor, and for the fire-walls, and the flues? [374]” 更には「要するにスクライブさん、144平方フィートやそこらはあるあの煙突を考慮に入れましたか？」“have you allowed for the legitimate chimney itself-some one hundred and forty-four square feet or thereabouts, Mr. Scribe? [374]” という語り手の追求に簡単に「化けの皮が剥がれる」“the cat leaps out of the bag [374]” たぐいのものである。ここで語り手が列挙している事例は、一見目立たないことからスクライブ氏が見逃していたものだが、いずれも煙突の構造上、必要なものばかりで、語り手に言わせれば「秘密」でも何でも無いのだが、スクライブ氏の様な功利主義者からみるとまさにこれが「秘密の納戸」となるのである。

それに対し、「再び秘密の納戸という見地に立ち返り、そこにいかなる驚くべきものが存在するかについて詳述し、徹底的に探したり調べ上げたりしないのは何とも口惜しい」“my wife reoccupies the ground of the secret closet, enlarging upon what wonders are there, and what a shame it is, not to seek it out and explore it. [375]” という妻の見解は一筋縄ではいかず、「たとえ秘密の納戸が存在するとしても、それは秘密のままにしておくべきだし、また結局秘密のままなのだ。そうだ、妻よ、ここで一度だけ言いたいことを言わせてもらおう。秘密の奥深いところを不敬にも暴き立てた結果、これまで限りない悲惨な災いが起こってきたのだ」“even if there were a secret closet, secret it should remain, and secret it shall. Yes, wife, here for once I must say my say. Infinite sad mischief has resulted from the profane bursting open of secret recesses. [376]” という語り手の説得にもなかなか応じようとしなない。その語り手の見解は、私利私欲に駆られて意地汚く秘密を暴き立てる行為が真理の探究と言えるのか？否、むしろ慎まなければならないのではないかという見解であるが、まさにあるものはありのままに受け入れる“Whatever is, is right.” という格言を信じる語り手らしい見解である。ところが妻の見解に見られる様に、世間は秘密を秘密のままにしておくことを許してくれない。それはスクライブ氏の手紙にある「秘密の納戸が隠された家に、それと知りつつ住むことは果たしてキリスト教徒らしい振る舞いかどうか必ずや正しく判断されるものと信じつつ」“Trusting that you may be guided aright, in determining whether it is Christian-like knowingly to reside in a house, hidden in which is a secret closet [369]” という結びの嚇し文句や「もし自分の記憶が正しければ、個人の持ち家の中に秘密の納戸を隠しておくことは、火薬の隠匿と同じく不法であると想定している法令があるはずだ」“if she remembered aright, there was a statute placing the keeping in private houses of secret closets on the same unlawful footing with the keeping of gunpowder [369]” という妻の発言からも伺える。

事態の解決を図るべく、語り手は50ドルでスクライブ氏を買収し、秘密の納戸など存在しないという「証明書 (the certificate)」を書いて貰うが、スクライブ氏の保証を得ても妻はいっこうに納得しない。このことは即ち、語り手と妻との間にコミュニケーションが成立していない以上、保証書など何の役にも立たないことを示しているのであり、却って如何にコミュニケーションを成立させるか？という大きな課題を語り手は突きつけられてしまった形となっている。そして益々煙突取り壊しに執念を燃やす妻から数々の受難を受けることとなった「私と私の煙突」は最後に次のような決意を述べることにより、この作品を終えている。

They think I am getting sour and unsocial. Some say that I have become a sort of mossy old misanthrope, while all the time the fact is, I am simply standing guard over my mossy old chimney; for it is resolved between me and my chimney, that I and my chimney will never surrender. [377]

皆、私が気むずかしく、人付き合いが悪くなってきたと思っている。中には私が苔むした人間嫌いの老人になってしまったという者もあるが、実はその間、私はただ私の苔むした煙突を守り続けていただけなのだ。それというのも私と私の煙突との間には、決して降伏などしてたまるかという確固たる決意があるか

らなのだ。

ここには世間の目に見えぬところで人知れず奮闘してきた「煙突」と一体となって奮闘していこうとする語り手の姿が伺える。これはまさに職業作家としては世から忘れ去られようが、先人たちの芸術作品と共に奮闘を続けることを改めて表明したMelvilleの戦闘宣言に他ならない。コミュニケーションの成立という難問も含め、語り手同様、まだまだMelvilleの苦しい闘いは続きそうだ。

注

- i Herman Melville, "I and My Chimney," in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, vol. 9 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. (Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1986), p. 357. 以下 "I and My Chimney" からの引用は全てこの版を用い、頁数は本文 [] 内に示すこととする。
- ii Marvin Fisher, *Going Under: Melville's Short Fiction and the American 1850's* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1977), pp. 199-200.
- iii 作品, *Billy Budd*においてもその冒頭で、蒸気船登場以前の「非散文的な時代 (the less prosaic time)」が懐古されている。See Melville, *Billy Budd, Sailor*, Eds. Harrison Hayford and Merton M. Sealts, Jr. (Chicago & London: The University of Chicago Press, 1962), p. 43.
- iv Herman Melville, *Moby-Dick or The Whale*, vol. 6 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. (Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1988), p. 145.
- v Ibid., p. 271.
- vi Ibid., p. 424.
- vii 後にランプ片手に石工の親方, Mr. Scribeを地下室に案内した際も、語り手は「我々はピラミッドの内部に居る様に思えた」"We seemed in the pyramids [365]"と述べている。他にもピラミッドへの言及は、*Moby-Dick*, *Pierre*, "Bartleby"等のMelvilleの諸作品に多数見受けられる。